

ほなほ歴史通信

第 4 号

1997. 9. 1

古いものを守ろう

ヨーロッパの諸都市に学ぶ

小学校の社会科の学習で、自分の家で一番古いものを挙げさせると、明治や江戸時代のお金などが古い方で、中には「うちで一番古いのはおじいさんです。」などという答もある。

農家でも、江戸時代に建てられた家などは、もうほとんどない。草ぶきの屋根など貴重なものになってしまった。

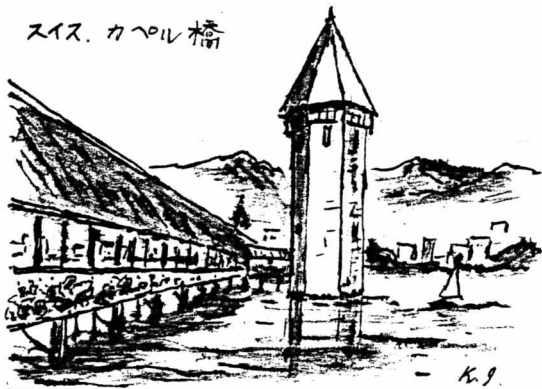
ヨーロッパへ行って感ずるのは古いものが大事に保存されていることである。特に建築物は目に付き易いこともあり、二、三〇〇年はおろか、もっと古い歴史を持つ建物が今なお現役で使用されているのには驚かされる。木造が多いわが国と違ってほとんどが石造であるということもあるが、古いものを大事に使っているという努力も見逃せない。

スイスのルツェルンにカペル橋という、川からの敵の侵入を防ぐ為に、一四世紀に作られた世界最古の木橋がある。長さが二〇〇メートルもある屋根付きの有名な橋である。数年前火災で焼け、予算不足の市は再建を断念したが、市民の強い要望でこの歴史ある橋は元通り再建することになった。

ローテンブルグなど市内へ入るには城壁の門が狭くバスの屋根が触れんばかりだし、街路は曲がりくねっていて狭い。それでも爆撃で破壊された町を元通りに復元した。不便でも中世の町並みを変えようとはしなかった。スペインのトレドは旧

市内へは車を入れない。不便さを我慢しても、かたくなに古い町を大事に保護しているその古さが市民の誇りでもあるのだと思う。

バルセロナのガウディ設計の聖家族教会はもう一五〇年も作り続けているが、高い塔が数本立っているだけで、内部はほとんどできていない。数人の人が石を削ったり鉄筋を切ったりしているだけで急いでいる様子などまるでない。あと二二〇年ばかりかかるとい



スイス、カペル橋

ろうと言われているが、これでは無理もない。予算が無く一気にはできないそうである。日本のある企業が塔の寄付を申し出たが宣伝に利用されるからと断った。何百年かかろうと、先人が手がけたものを、途中で縮小したり変更したりせず受け継いでいる。古いものを大事にする心意気を感じる。

わが大子町にも残したい古い物は多々あると思う。その一つ一つがわが町の歴史を物語る文化財だ。今失っては次の世代に残すことはできないし、復元することは更に難しい。これを未来に残すことは、現代を生きる我々の責任だと思ふ。(石井)

八溝山と十返舎一九

八溝山と有名人との関わりはいろいろ知られているが、弥次郎兵衛・喜多八の『東海道中膝栗毛』で一世を風靡した十返舎一九のことはあまり知られていない。

周知のように、一九は、寛政から文化文政期にかけて大活躍した滑稽本作家である。彼は金草鞋十編「坂東順礼」を著し、そのなかで八溝山観音と小生瀬の旅籠のことを書いている。本稿では、この八溝山観音のことについて紹介してみたい。

「坂東順礼」には、社務所らしき建物の屋根、大きな香炉、受札所らしき建物、そして幅の広い石造りの階段を上る五人の登拝者等の挿絵が、江戸時代の順礼風俗よろしく描かれているが、残念ながら八溝山の面影はない。そこには、版木による文字で次のように書かれている。

大田八らよりくろはといふにゆく(中略)それよりのがミ川かミをすぎてやみぞのく八んをんなりこのところ第廿一ばんの札所なり

十一めんくわんをん御ゑいか
まよふミが今八やミぞへまいりきて ほとけのひかりやまもかかやく

これが書出しである。そして、次の狂歌が詠まれている。

① 光陰の矢ミぞの山に来てミればはや夕影のいるばかりなり

② ねがへただあたりはずさぬ御利益八弓につがひし矢ミぞ観音

この狂歌、よく読んでみると、八溝を「矢ミぞ」と書き、

「光陰矢の如し」の諺を巧みに取り入れて「光陰の矢」と表現し、さらに「夕影のいる」という形で「入る」と「射る」を掛けているあたりはさすがと言えよう。また二首目の、願いは「あたりはずさぬ」との表現は、「弓につがひし矢」みぞ観音と願いも弓矢ものを外さないことを掛けた駄洒落を駆使したものと言える。これら狂歌に、なお文章が続く。

「婆さんお前も四五十年も若いとわしが手を引いてこの坂を登るけれど婆さままでは気がない」

「そんなにいわつしやるな わしはこれでもまだ気がある」と見えて 昨夜のとまりでわしの寝所へ来た人があったからこりやかたじけなく 人は年寄りをいやがるのあなたはおわざわわしのところへござった心ざしがうれしい こつちへはいらつしやれと手をとって引込もうとしたら この人びつくりしてこれはお門違いだこなたではないとわしをけとばしてつんにげてしまいました」

「イヤ婆さまそのお前のところへいったハわしでござる わしは順礼の娘のところへいくつもりで まちがへていったのだが それからその娘のところへいきましたら よくねているからそつとはいると目をさまして この野郎め と強気にわしの腕をねじあげほうり出されてにげて帰りました お前のところでよせばよかつたに 残念」

(鶴岡節雄『十返舎一九の常陸道中記』千秋社、より)
弥次さん喜多さんではないが、この老人二人の色気じみた滑稽な会話は、読む者を一九の世界に引きずり込む一九一流の表現であろう。

十返舎一九が八溝山に登った？今のところ、それを確かめる史料は発見されていないが、興味は尽きない。(江田七男)

【史料紹介】

土口文書解読誌を兼ねて

左の史料は、袋田・桜岡長良氏所蔵文書の写しである。
三月十九日付けで、門井久二郎と関幸三郎の連名により、袋田村庄屋宛に通達された御達しである。文書に年次は記されていないが、差出人の門井と関は、天保期の水戸藩北郡奉行所(飛騨)の手代であることが、『江水御規式帳』(美濃國沓掛藩の職録)から分かり、さらに「御巡村」や「上覧」などの文言から、水戸藩主の巡村に関するものであることが分かる。

天保期の水戸藩主は、文政十二年(一八三〇)十月に第九代藩主に就任した斉昭であり、斉昭は天保五年(一八三四)四月一日から五日にかけて大子地方を巡村している。

文書内容は、主君の巡村の折、袋田の滝をご覧になるので、その旨を承知しておくようにというものである。
袋田の滝を巡視したのは、四月三日の午後である。

門井久二郎

関幸三郎

袋田村
庄屋

(解読—原文のまま)
當月下旬北郷筋
御巡村可被遊旨被
仰出候ニ付其村瀧
上覧可被遊候条心
得ニ申達候以上

三月十九日

門井久二郎
関 幸三郎

袋田村庄屋

【編集後記】

エルニーニョ現象の予報があつて冷夏が心配されましたが、茨城の場合は、全体的に「夏らしい夏」だったとの印象です。ことに七月五日には、大子で三十七度というすさまじい暑さを経験しました。皆様は、どのような夏を過ごされましたでしょうか。

さて、今回の第四号には、初めてゲスト執筆者を迎えることができました。江田七男さんです。昨年三月末に大子町役場を定年退職された江田さんは、かつては大子町史編さん事業の事務方の中心におられた方です。これを機に、今後は準レギュラー執筆者として蘊蓄を御披露いただければ幸いです。

本号には、他に三つの記事を載せておりますが、とくに石井さんの巻頭エッセーには種々考えさせられるものがあります。一刻も早く欧米に追いつき追い越せ、これが長い間日本の近代化を支えた精神でしたが、その過程で実は大事なものを失ってきたのではないかと、もう一度今の暮らしを振り返る必要があるのではないかと、そんな問題提起を読み取ることが出来ます。真摯に受け止めては、これが率直な感想です。

さて、次号ではどのような情報を皆様にお届けできますか、お楽しみに。
(斎藤)

編集人	斎藤 典生 (茨城大学人文学部)
	野内 正美 (茨城県立歴史館)
	石井喜志夫 (元教員)
	小澤 圀彦 (元教員)
	井上 和司 (大子町社会教育課)
編集発行	遊史の会
	大子町立中央公民館歴史資料室付
	久慈郡大子町大字池田二六六九番地
TEL	〇二九五七―二二六二七